

幼児期のいじめ問題と指導方法の考察

－幼児期は人間形成の基礎－

10L021 貝沼 里保

1. 研究の問題と目的

私は、教職過程を履修する中で特に「いじめ」について深く学びたいと感じていた。文部科学省では「いじめについては『どの子どもにも、どの学校においても起こり得る』ものであること」¹と指摘しているように、いじめはより身近なものとなっている。2011年10月11日には滋賀県大津市の中学2年生が自殺するといった事件が起こっている。1999年～2007年の間には14人の児童生徒がいじめを理由に自殺している。新潟県でもいじめが原因で自殺したという事件が何度か起こっている。

新潟県教育委員会は平成24年度にいじめが原因で関する調査を行った。調査の結果、いじめの認知件数は全国で198,108件（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の合計）のところ、新潟県は1,673件であった。児童生徒の自殺者数は全国で196人、新潟県で8人であった²。こうしたことから「いじめ」は深刻化してきていると言える。だからからこそ教育現場では細心の注意を払う必要があり、「いじめ」への対応が重要となる。

文部科学省では2013年「『いじめ』とは、『児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいうこと』³と定義した。なぜいじめは起こるのか、文部科学省はいじめの背景として「①児童生徒の問題、②家庭の問題、③学校の問題」⁴と大きく3つに分けて提示している。その中で①の児童生徒の問題には、対人関係の不得手、表面的な友人関係、欲求不満耐性の欠如、思いやりの欠如、成就感・満足感を得る機会の減少、進学をめぐる競争意識、将来の目標の喪失の問題がある。私はこの中で特に対人関係に注目して「いじめ」について検討する。

森光・関らが「幼児期は人間形成の基礎となる」⁵と述べているように、幼児期は基礎を作る大切な時期であることから、この時期に指導を行うことが効果的であり、理想である。また森光は「豊かな心の基礎は幼児期に形成される」⁶と述べている。文部科学省のいじめの定義では児童生徒を対象としているが、幼児期には「いじめ」はないのか。深谷は「『喧嘩や意地悪』は、幼稚園やそれ以前の段階に、また小学生の低学年によくみられる行動である。しかしこれらの攻撃欲求は長続きせず、たいていはその場限りで後を残さない」⁷と述べていることから、幼児期のいじめはないものとされてきた。畠山・山崎も「幼児におけるいじめの実態は解明されていない。」⁸と言っている。しかし、村田・佐藤は「幼稚園の教師もいじめ問題について真剣に考える必要がある。」⁸と述べ、「いじめ」の走りや捉えられる言動がみられることを報告している。また、畠山・山崎の研究でも「参与観察法を用い、長期間幼児の様子を観察することで、いじめとしての性質をもつ行動が幼児期から存在することを明らかにした。」⁹と報告されていることから幼児期にもいじめは存在するという見解もある。

また、文部科学省は「いじめは、からかいや冷やかしなどから傷害や恐喝等の犯罪行為となり得るものまで段階（レベル）がある。」¹⁰と述べているように、「からかい」も「いじめ」の一部となる場合がある。からかいとは「相手を不快にさせたり困らせたりする攻撃的な行為に、それが冗談であることをほのめかす遊戯的なサインが伴われた行為」と牧・湯澤は述べている。また「からかいは攻撃性をコントロー

ルした遊び心の表現であり、幼児のからかいはそのようなコミュニケーション様式を学ぶ貴重な機会となっている可能性がある¹¹とも述べている。からかいは幼児の成長過程の中のコミュニケーションの一環であると牧・湯澤は述べているが、からかいをいじめへ発展させないためにはどのような指導が必要なのだろうか。畠山・山崎が指摘しているように、幼児におけるいじめの実態は解明されていない。「いじめている方は悪意を感じず『戦いごっこ』をして一緒に遊んでいる気持ちである。」¹²のかもしれない。または「幼児期のいじめのきっかけには、「被害者のスキル不足」という理由が存在した」¹³ということかもしれない。

幼児の行うことすべてに対して指導することについて、遠藤・和田・井上・河邊は『「いじめの解決は幼児期の指導から』』といて日常生活で起こる様々なトラブルを『いじめの芽』と捉え『摘む』』という発想で指導を行ったとしたら、幼児の自己認識や相手への思いやりを育てることはできない。」と述べている。ではどのような指導方法によれば幼児の成長を促しつつ、いじめやからかひに対して指導することができるのか。

畠山・山崎らの研究で、いじめとしての性質をもつ行動が幼児期から存在することを明らかにしたと述べられていることから、本研究では幼児期にも「いじめ」があるものとし、どうしたら「いじめ」が起これにくいクラスを作ることができるのかを検討したい。また幼児期からの指導が必要不可欠であることから「からかひ」と「いじめ」の違いについて検討し、幼児にとって適切な指導方法についても考察する。

2. 研究の方法

新潟市内の保育士にアンケートを行い、「いじめ」と「からかひ」の違いについて調査する。3つの事例についてどのように思ったか、その事例のような問題がもし起こったらどのように指導するか、「いじめ」と「からかひ」をどのように区別しているか、「いじめ」や「からかひ」に対してどのような指導を行っているかについて調査する。調査結果を基にいじめとからかひの違いとは何か、どのような指導を行えばからかひがいじめに発展しないかについて考察する。アンケートは、牧 亮太・湯澤 正通¹⁵と遠藤 良江・和田 信行・井上 千枝美・河邊 貴子¹⁶の研究を参考に作成した。アンケートは、3つの事例について、「あなたのクラスで事例と同じようなことが起きた場合どのように指導するか」、「いじめとからかひをどのように区別しているか」、「いじめ・からかひに対する指導を行う際どのようなことを心掛けているか」を問う質問で構成されている。

3. 調査

3-1 調査の目的

この調査は、「いじめ」と「からかひ」の違いはあるのか、また、その違いはどのようなものかについて、現職の保育士に調査することで明らかにすることを目的とする。また「いじめ」、「からかひ」があった場合どのように指導するかについても調査する。現職の保育士に質問することで、実際の現場で行っている指導やいじめやからかひについての認識を調査することができると思う。

3-2 調査対象者

新潟市内の保育士16名

3-3 調査期日

2013年12月9日～12日

3-4 調査方法

調査は質問1から質問12の12問から構成されている。職歴が5年未満（4名）、10年未満（6名）、10年以上（6名）に分けてアンケート結果を検討したところ、職歴による大きな違いは見られなかったので（表1～表3）職歴による区別はせずに分析する。3つの事例について、各事例ごとにその事例が「いじめ」なのか、「からかい」なのか、それとも「どちらでもない」のかを選択してもらい、次に理由を書いてもらう。そして、これらの事例のような問題が担当しているクラスで起こった場合どのように指導するか書いてもらう。

3-5 調査結果

(1) 事例1の調査結果

事例1：

部屋の一角に床に座って壁にもたれておしゃべりをしているC男、D男、E男の3人。C男とD男の間で話が盛り上がり、E男は会話に加われずにいる。そこに、部屋をウロウロしていたF男がやって来て、E男の視線の先に割り込み、E男の顔をじっくり見ながら、ブロックを握った手でゆっくりとパンチしようとする。F男の動きが視界に入ったE男はパンチをガードし、ニヤッと笑ってブロックを取ろうとする。F男はブロックを引っ込み、ブロックを守るように床にうつ伏せになる。E男はその上にまたがり、お尻を叩き始める。—この後、お互いを叩いたり、くすぐったりしてじゃれ合って遊ぶ。

<牧・湯澤、2011年、34頁より引用、筆者傍線>

表1 事例1の調査結果

	全体	5年未満	10年未満	10年以上
いじめ	0名（0%）	0名（0%）	0名（0%）	0名（0%）
からかい	4名（25%）	1名（6.25%）	1名（6.25%）	2名（12.5%）
どちらでもない	12名（75%）	3名（18.75%）	5名（31.25%）	4名（25%）

<筆者作成>

1つ目の事例については、「いじめ」と答えた保育士は0名（0%）、「からかい」と答えた保育士は16名中4名（25%）、「どちらでもない」と答えた保育士は16名中12名（75%）だった。

「からかい」だと答えた保育士からは「F男・E男ともに遊ぶ相手が見つかり、ちょっかいを出しているだけ」「E男が会話に入れないことからからかっているように思える」「自分のことを気にしてほしいのではないか」という理由が挙がった。

「どちらでもない」と答えた理由について、「F男はE男に対し、悪意を感じない。むしろ暇そうだったから声をかける代わりにゆっくりパンチして『気づいてくれ』と言っているように感じた。からかいともまた違うそのようなものだ、若干意地悪に思える言動があってもいいと思うが、私はこの子達ならではの遊び方なのではないかと感じる」、「“お互いを叩いたり、くすぐったりしてじゃれ合って遊ぶ”と書い

であるので、遊びの一つになったのではないのでしょうか」、「お互いの立場が対等だと思う。目と目で意志の疎通を図って行動」というように「子どもたちなりのコミュニケーションの仕方ではないか」という理由が多く、「このようなことが長く続くようだとからかいやいじめにつながる可能性もあるが、いじめでも、からかいでもない」と答える保育士が多数であった。少数意見としては関わり方、表現の仕方がわからないためにこのような行動を取ったのではないかという理由が挙がった。

指導に関しては「からかい」と答えた保育士も、「どちらでもない」と答えた保育士もその方法に違いはなかった。指導方法として「様子を見ながら『楽しそうね』『〇〇君と仲良しだね』など声掛けをする。喧嘩になったときお互いの気持ちが入り合えるように順序だてて話をし、どこがいけなかったのか自分で気づかせる」、「友だちと一緒に遊ぶ楽しい気持ちを受け止めながらも叩いたり、パンチしたりすることは危ないことだということを伝える」、「最終的にはお互いじゃれ合って仲良くしているようなのでお互い機嫌を見計らってなぜあのようなことをしたのかを聞いてみて内容によって話を進める」、「すぐに叱るのではなくどうしてそういうことをしたのか、子どもの気持ちを聞き、お互いよくないことを伝える。責める・叱るのではなく、子どもの気持ちを受け取る」というものが挙がった。幼児の楽しそうな様子を見守るという回答が多く、加えて、身体的な危害がおよぶような行為に対しては幼児たちに注意や指導を行うといった回答も多かった。

(2) 事例2の調査結果

事例2：

屋外に出て遊ぼうとする子どもたち。屋外で遊ぶときには、鉄棒で1回逆上がりの練習をしてから遊ぶことになっている。みんなが次々と鉄棒をする様子を、A男は数メートル離れたところから見ている。

B男が逆上がりをしようと、地面を蹴り上げるが、勢いが足りず、お腹で鉄棒に乗るような状態で止まってしまう。すると、A男が近づいてきて「うー」と甲高い声を出して笑いながら、B男のお尻をつつく。B男は逆上がりを中断して着地し、A男の方を見たまま、一歩後方に退く。鉄棒を邪魔された形になったB男は鉄棒を握ったまましている。A男は大げさに両手をパンパンと叩いて、楽しそうに笑ってみせる。しかし、B男は視線を鉄棒に戻し、もう一度逆上がりに挑戦する。

<牧・湯澤、2011年、33頁より引用、筆者傍線>

表2 事例2の調査結果

	全体	5年未満	10年未満	10年以上
いじめ	1名 (6.25%)	0名 (0%)	0名 (0%)	1名 (6.25%)
からかい	12名 (75%)	4名 (25%)	5名 (31.25%)	3名 (18.75%)
どちらでもない	3名 (18.75%)	0名 (0%)	1名 (6.25%)	2名 (12.5%)

<筆者作成>

2つ目の事例については、12名(75%)の保育士が「からかい」だと答えた。「からかい」と答えた保育士は「もしかしたらA男もできないのではないかと思う。それを隠して、できない人をからかい、自分をごまかしているのではないか。やられたB男はかわいそうだが、いじめとは思わない」、「A男はできる人たちのところに仲間に入れず淋しいのかもしれない」、「B男のその時の状態がA男にはおもしろく感じ

ただけなのだろうと思ったから」、「B男の気持ちがA男に向いていない。A男だけが楽しんでいる」というように一生懸命頑張っている幼児に対してふざけて接している、おもしろがっている場面からこのように答えた保育士が多かった。「からかい」なのか興味の示し方が幼いのか悩むという保育士もいた。

「いじめ」だと答えた保育士1名は、その理由として「できなくて苦しんでいるところをふざけてついたりして、片方は相手が困っているのを楽しんでいるように感じる」と理由を説明している。

「どちらでもない」と答えた保育士3名は、その理由として「何回もこのような事が続いたら『いじめ』。今の段階ではどちらともいえない」、「特別な配慮がいる子なのではないかと思った」を挙げている。

指導としては、どの保育士も同様の指導方法を挙げていた。「A男にB男と遊びたいのかを聞き、今鉄棒の練習をしているB男を応援してほしいことを伝え一緒に応援する。またA男も一緒に鉄棒に誘う。終わったら2人で遊ぶきっかけになる言葉かけをする」、「B男の挑戦している姿、頑張っている姿を認めたくさんほめて応援する。また『A男君もできるかな?』『一緒にやってみよう』など前向きな言葉を掛けて一緒に楽しむ」のように注意するのではなく、鉄棒をしている幼児を褒め、一緒に活動するよう促す指導方法や、「鉄棒をしているときにいたずらをするとうだちがけがをしてしまうということを伝え、A男もできないことを馬鹿にされたらどんな気持ちになるのかを聞いてみる」、「一生懸命行っている最中に邪魔をしてはいけないことを伝える」「B男が一生懸命やっていることを伝え、一生懸命やっていることに対して笑ってしまうのはおかしいことを伝える。応援してあげようと一緒に応援できるように関わる」というような幼児のしたことに対して注意し、どうしたらよかったのか、これからどうしたらいいのか考えさせ、それができるよう導く指導方法が挙げられた。

(3) 事例3の調査結果

事例3：

男児が4人で基地ごっこをしている。「入れて」と誰かが言うと「いいよ」と答えるのに、C児だけは「だめ」と言われることが続く。不満をもつC児が基地を壊す行動をとることもあり、入れてもらえない日が何日も続く。

ある日、植木の陰で、数人が「戦いごっこ」と称してC児を取り囲んでぶったり蹴ったりしている。保育者が近づくと皆さっと散る。

＜遠藤・和田・井上・河邊、1997年、596頁より引用、筆者傍線＞

表3 事例3の調査結果

	全体	5年未満	10年未満	10年以上
いじめ	14名 (87.5%)	4名 (25%)	5名 (31.25%)	5名 (31.25%)
からかい	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)
どちらでもない	2名 (12.5%)	0名 (0%)	1名 (6.25%)	1名 (6.25%)

＜筆者作成＞

3つ目の事例については、圧倒的に「いじめ」と答える保育士が多く、16名中14名(87%)であった。どちらでもないと答えた保育士は16名中2名(12%)であった。

「いじめ」と答えた保育士の理由は「何日も同じ子にだけ『だめ』と言っていたりさらに取り囲んで数人でぶったり蹴ったりしているため『からかい』の限度を超えている」、「集団でC児のみを攻撃してい

る」、「保育者がいない場面で暴力的行為をすることはいじめと行ってよい」、「保育者が来ると逃げるのは自分たちがいけないことをしている認識がある。C児だけを仲間はずれにしていることに集団としての意図が感じられる」、「“C児だけ”、“言われることが続く”、“C児を取り囲んでぶったり蹴ったり”、“何日も続く”などというところからC児への長期的な精神的苦痛は大きく感じられる。また複数人でC児へそのように関わっているから」というように保育者が近づくと散った点や複数人で1人をぶったり蹴ったりする行為をいじめと捉えた保育士が多かった。最初の下線部は意地悪に近いところもあると理由付けしていた保育士もいたが、2つ目の下線部でいじめだと感じた保育士が多かった。

「どちらでもない」と答えた理由として「一方的に身体を傷つける行為は間違っている。毎日このような状況が続くなどであればいじめの芽と思います」、「C児は『だめ』と言われて基地を壊すこともあるので、入れてもらえないのもわかる。戦いごっこも一回だけなのか、数回続いているのかわからないため」と毎回続いているのであれば、「いじめ」だがこの文だけでは「いじめ」とは言えないと答えた。

指導方法については、「いじめ」と答えた保育士も、「どちらでもない」と答えた保育士も違いはなかった。「なぜC児が遊びに入ることを「だめ」と言うのか理由を聞く。その上で理由があるにしても数人で1人を攻撃するのはどうか考えられるような言葉がけ等をしていく」、「お互い理由があると思うのでまずは話を聞く。C児に対しては壊してしまうからみんなが嫌な気持ちになること。しかし入れてくれなかったからやったことを共感することも伝える。複数児に対しては何があっても叩いたり、蹴ったりすることはいけないことだと伝え、C児にも理由があつてやったことだということを伝える。自分に置き換えてみて相手はどんな気持ちかお互いに考えられるように言葉がけをする」というように当事者の幼児たちから話を聞きお互いが納得いくように解決策を見つけるような指導方法や「紙芝居等を使って（オリジナル）いじめについて、具体的に話して伝えていきます」、「年長児であればミーティング、話し合いをする、またはロールプレイでC児の気持ちを再現します。（なぜC児だけだめなのかの背景はみる）」のようにクラス全体に問題を伝え、クラス全体で解決策を考える。または「C児と一緒にいれてもらう。だめと言われて基地を壊そうとするC児を止めて落ち着かせ、C児の気持ちを4人に伝える。戦いごっこは主任や園長に相談して自分だけで解決はしない」のように保育士が幼児の輪の中に入り仲介役をすることによって問題を改善し、かつ起きたことを園全体で周知する、職員で話し合い情報を共有するという指導方法が挙げられた。指導方法だけでなく、ここでは園全体で問題に取り組んでいくことを述べている保育士が多かった。

（4）いじめとからかいの区別について

区別することは難しいと多くの保育士が答えていたが、「からかい」がひどくなると「いじめ」につながる可能性があるかと答えていた保育士が数名いた。必ずそうであるとは言えないが、可能性は少なからずあると言える。「区別するのは難しい。どちらもやられた側は嫌な思いをします。傷つきます。結果は同じではないか」、「どちらも似ていて、延長線上にあると思いますが一方的であったり連続していたり『やめて』と意思表示があるのに、悪意をもってからかうのは『いじめ』だと思う。されているほうが仲間としての愛情を認識し、互いにわかってしている（本当にいやではない）なら『からかい』」、「いじめは数日続いたりすることと考え、からかいはその時だけに起こるものとする」、「いじめは一人ぼっち、一対複数で一方的に攻撃している。対象者が悲しい思い、嫌な思いをしている時。からかいはお互いに気持ちは通っていて手が出たり口がでたりする時」、「その境ははっきり区別できるものとは思っていない」、「年齢にもよると思う。たとえ同じ行為だとしても2・3歳児と4・5歳児ではその理由は違うと思う。いじめの可能性は5歳くらいから」ということが挙げられた。

(5) いじめに対する指導の心掛け

「いじめ」に対する指導は「子どもが相手にとって嫌なことを気付けるような言葉かけや話をする」、
「すぐ叱るのではなく、子どもの気持ちを受け止め良くないと伝える」、「チクチク言葉やフワフワ言葉
などを子どもたちから聞き、言われたらどう思うかなど子どもたちから意見を聞きだしながら自分で気付
けるような働きかけをしていく」、「なぜいけないのか、なぜからかわれているのか本人が気づけるよ
うに問いかけながら話す。日々の保育の中で優しい言葉や気持ちがみられたら、その都度あったことを話し
保育士の嬉しい気持ちを『素敵』『ありがとう』とみんなに伝える」、「『良いことは良い、悪いことは悪
い』を伝えるが、子どもはすぐには分からないと思うので、いじめられている子と保育士と一緒に楽しみ
いじめている子が『アイツ悪い奴じゃないな』と感じてもらえるように過ごす。特に口頭で。」、「しっか
りと実態を把握すること。特に女の子は大人の見えていないところでしたり言ったりするので、その現場を
きちんと確認できるまでは指導もできない」というように幼児たち自身に気づかせるような言葉掛けや日
頃の指導について挙げられた。

(6) からかいに対する指導の心掛け

「からかい」に対する指導については「いじめの指導とあまり変わらないと思うが、自分がされたら、
自分が言われたらどうかを考えてもらい気づけるようにしていく」、「一時的な行為も多いためその場で
声掛けし注意する」、「友だちと一緒に遊ぶ楽しさや嬉しさには共感を持ちながらも相手が嫌だと思
うことはしないことを伝える」、「怪我をする幼児がでないように、『楽しいのとふざけるのは違う』こと
を伝える。されたら嫌なことは相手にもしないと伝える」、「嫌な言葉は相手を怒らせる、悲しませるこ
とをその都度はなす」、「いじめへと発展しないように指導する」、「繰り返し伝えること。そのような事
をする子の多くには根気が必要」というように「いじめ」と区別していない保育士が多いことから、「い
じめ」の指導とあまり違いは見られない。「いじめ」の指導にも言えることだが、このような問題に対
しての指導は根気が必要であり、繰り返し指導することで改善がみられると記入していた保育士もいた。

3-6 調査結果の考察

事例の内容が「いじめ」であると考えた保育士にも、「からかい」であると考えた保育士にも一貫して
言えることは、保育士によって捉え方は違うが、幼児への指導は、どの保育士も正しいこと、間違っ
ていることをきちんと指導し、ただ注意するのではなく、幼児が自分自身で理解できるよう指導している工夫
が調査結果から見られた。幼児だからといって、大人が何でも与えるのではなく幼児に合った指導方法で
教育することがいかに大切かわかった。

どの事例の答えにも多かったのは、幼児に考えさせて、問題を解決するといった指導方法だった。保育
士が幼児にすべてを教えるのではなく、順序立てて、なぜそうなったのかという原因と幼児たちの言い分
や過程を聞き、どうしたらこの先良くなるのかということを考えさせる方法が多かった。「いじめやから
かいは境はわからない。からかいが続くことでいじめにつながることもある」、「やっていることが高度
なので年長くらいかなあと考えると“いつも”であることや“数人でぶつたり蹴ったり”していることを
考えるといじめだと思う」、「どちらも双方の話を大事にして聞き、気持ちを受け止めてあげる。お互
いの気持ちがわかるよう代弁したりして伝えるようにしている。それをやっていいことがあるかどうか考
えられるように声をかけている」、「『いじめに対する』というわけではないが自分がしたこと
で相手はどんな気持ちになるのかと“相手”について一緒に考えます。相手がどんな風に思うと自分
はどんなのかと考えたりさせせることもあります」、「『いじめの指導』というものではないですが、
相手の気持ちを知る、相

手の気持ちに気づく、というところを大切にしています。『それはダメ』と伝えるのではなく、どうしてダメなのかということに気づいたり考えたりできるようにしています。相手がいやなことに気付いて、考えられるように。でも保育園児はちょっかいを出し合って、じゃれ合っても度を越えると相手は嫌だという実感する体験も大切です。けんかもいっぱいしながら、人間関係づくりの基本を学んでいくのではないかと回答から、指導する際には「いじめ」や「からかい」に限らず適切な時に適切な指導を行うことが大切であるとわかった。

また、とても重要なことだが問題が起きた際にはどんなに小さな問題でも一人で解決しようとするのではなく、園長や上司、他の先生方に伝え、時には協力をしてもらい解決へ向けることも必要であることも分かった。そのためには日ごろから保育士同士の連携を密に行うこと、コミュニケーションを取ることが大切だ。また幼児の保護者とのコミュニケーションも必須である。幼児の家庭環境、背景を知った上で指導を行うことが必要であるため、幼児理解に努めるべきである。

3つ事例を挙げたが、事例の中で年齢や背景などを特定していなかったことから、わからないと答える保育士も多かった。「この場面だけでは4人の心理状態を把握することはできない」「これだけの情報では判断しかねます。年齢や普段の生活の中でその子自身がどういう子なのかを知ったうえで、意地悪をしているのか、からかっているのか、ただ遊んでいるのかを判断する」という回答があったことから年齢や行為の背景等も考慮して幼児を理解することが重要である。そのために幼児の家庭環境や友人関係、性格などの情報を掴み、幼児と接することが必要不可欠である。

4. 調査結果から見る指導方法の考察

調査結果から、①いじめとからかいの違いは複数で1人に対して攻撃していないか、悪意があるか、継続して攻撃していないかで決まる。②幼児にすぐ叱る、注意するのではなく、よく話を聞いて問題の背景や幼児の友人関係、家庭環境や性格を考慮して指導する。③問題が起こった場合、一人で解決するのではなく園全体で問題に取り組む。④問題に関係のある当事者だけで話を終わらせるのではなく、ロールプレイや紙芝居を用いて、クラス全体の問題として他の幼児にも考えさせる。この4つの結果を導き出すことができた。

指導の方法としては、幼児に考えさせて、正しい方向に導くといった指導方法が多かった。すべて保育士が幼児に教えるのではなく、順序立てて、原因とその過程、そして、今後どうしたら良いか考えさせ、問題を解決させることがとても重要である。注意すること、叱ることももちろん必要であるが、すぐに叱るのではなく、よく幼児の話を聞きお互いが納得して問題を解決する方向に導くのが幼児に必要な指導方法である。また、④で挙げたロールプレイや紙芝居を用いた指導方法は、当事者の幼児だけでなく、クラス全体が「友だちが嫌がることをしてはいけない」、「自分がされて嫌なことは相手にしない」など人間関係について学ぶことができるとも効果的な方法である。

指導を行った後も注意深く幼児の様子を観察する必要がある。指導が甘かったか、幼児の性格のせいなのか、どんな理由にせよ問題を繰り返すことがある。一度で幼児たちに伝われば良いが、繰り返しの指導が必要な場合もある。幼児の交友関係をよく理解した上で、問題が起こった後の幼児の観察が大切である。

私が最も重要であると考えすることは、幼児の行動に対して指導するところと、見守るところを見極めることである。幼児は友人とのコミュニケーションで多くのことを学ぶ。そのため、問題行動だと捉え幼児の行動を制御してしまうと、そこで成長が止まってしまう場合もある。時には友人と喧嘩することも大切であると考えられる。なぜなら遠藤・和田・井上・河邊が「日常生活で起こる様々なトラブルを『いじめの

芽』と捉え『摘む』という発想で指導を行ったとしたら、幼児の自己認識や相手への真の思いやりを育てることはできない¹⁷と述べているからである。幼児なりの意図があつての行動である可能性もあるので、指導する側はよく観察した上で指導する必要がある。そのためには観察力を鍛える必要がある。幼児を観察する方法の検討は今後の課題としたい。

5. 研究のまとめ

本研究では、「いじめ」と「からかい」の違いはあるのか、またそれはどのような違いか、そして、「いじめ」や「からかい」に対しての指導方法について検討を行った。幼児を対象にし、どのような指導を行うと幼児期にいじめに発展しないかアンケートを用いて調査した。何でもいじめと捉えて幼児の行動を指導することは幼児が体験することを妨げてしまうことがある。幼児期は人間形成のための重要な時期であるため、この時期にさまざまなことを経験する必要がある。それは喧嘩も含まれる。喧嘩をすることは人との接し方を学ぶことができる絶好の機会である。その喧嘩がもしかしたらいじめへと発展してしまうかもしれない。そんなとき良い人間関係にするため導くのが保育士の使命である。

研究の結果から、いじめについて、ある保育士は「日常的に繰り返されていること」と述べている。また、ある保育士は「一人に対して大勢で攻撃していること」と捉えている。幼児への指導方法や見方も「幼児の性格や家庭環境を考え指導する」と述べている保育士や、「幼児自身によく考えさせ、一方的な注意だけで終わらないようにする」といった方法を採る保育士がいた。したがって、幼児を指導する際は幼児の性格や家庭環境、友人関係など問題の背景をよく観察してから行うことが必要である。目の前に起こっていることだけで、幼児を叱る、注意することも時には必要であるが、それだけでは解決には至らない。よく見極め、適切な指導を適切なときに行うことが重要である。問題がすぐに治まったとしても、なぜあの時間問題が起こったのか幼児に話を聞いて、次に同じようなことが起こった時の参考にすることも大切である。

幼児が成長し、小学生、中学生になってもいじめをしない、観衆や傍観者¹⁸にならないためには幼児期からよりよい人間関係を作り、相手への思いやりの心を成長させる必要がある。そのためには保育士の指導が大切であり、その後の成長を左右すると言っても過言ではない。人の痛みのわかる優しい人間に育てるために、保育士は常に子どもたちを見守り、時には厳しく注意し、叱り、時には伸び伸びと幼児の成長を見守る役目がある。

以上のことから保育士が行う幼児期の指導は次の3点が効果的であると考えられる。

- 1、幼児の問題行動に対して、叱る・注意するのではなく、幼児の話をよく聞いた上で指導を行う。
- 2、問題が起きた際には1人で指導するのではなく、園全体に報告し、他の先生方から情報を得る、協力してもらい解決するよう努める。
- 3、ロールプレイや紙芝居を用いて、クラス全体で問題について考える。

この3点を意識して指導することによって、「いじめ」が発展して最悪の事態を招く前に解決することが有効であると考えられる。

幼児のすべてが悪意を持って相手を傷つけている訳ではない。関わり方がわからない、うまく声を掛けられないといった幼児なりの理由がある可能性もある。特別な教育的支援が必要な幼児がクラスにいる可能性もある。さまざまな条件を考慮しながら、どんな状況でも最適な指導ができるよう幼児をよく観察し、幼児の情報を得る必要がある。

私は将来、幼児教育に携わりたいと考えている。私が保育士になった際は幼児に対して恥ずかしくない

姿勢で幼児に接したい。なぜなら子どもは大人の背中を見て育つからである。指導する自分が恥ずかしい人間ならば、幼児に指導しても伝わらない可能性がある。幼児期から人間としての基礎が養われれば、成長してもそれは変わらない。私は幼児が成長しても相手が嫌がることを行わないように教育していきたい。適切な指導ができることによって、「いじめ」も減らすことが可能と考える。幼児の行動の中から指導しなくてはならないものとそうでないものを見分けるのはとても大変なことであるが、幼児をよく観察し、今回の研究で明らかにしたことを実際の教育現場で効果的であるか実証することが今後の課題である。

註

- 1 文部科学省「いじめの問題への取組の徹底について（通知）」2006年。
- 2 新潟県教育委員会「平成24年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』結果について」2013年。
- 3 文部科学省「いじめの防止等のための基本的な方針」2013年。
- 4 文部科学省「いじめへの対応のヒント」2003年。
- 5 森光義昭・関聡「幼児教育担当者の教育観」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第32号、2009年、19-27頁。
- 6 森光義昭「教職課程履修者の感性に関する認識の実態」『近畿大学九州短期大学研究紀要』第36号、2006年、27-44頁。
- 7 深谷和子『「いじめ世界」の子どもたち—教室の深淵』金子書房、1996年。
- 8 村田洋子・佐藤登、「保育内容の研究（10）—いじめの走りとも考えられる、幼児の言動について—」、『日本保育学会大会研究論文集』第51号、1998年、538-539頁。
- 9 畠山美穂・山崎晃「幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究：参与観察を通して得られたいじめの実態」『発達心理学研究』第14巻、第3号、2003年、284-293頁。
- 10 文部科学省「子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議まとめ（第1次）（案）『いじめを早期に発見し、早期に対応できる体制づくり—ぬくもりのある学校・地域社会をめざして—』2007年。
- 11 牧亮太・湯澤正通「幼児の遊びにおけるからかいの機能」『保育学研究』第49巻、第2号、2001年、30-40頁。
- 12 村田洋子・佐藤登「保育内容の研究（10）—いじめの走りとも考えられる、幼児の言動について—」、『日本保育学会大会研究論文集』第51号、1998年、538-539頁。
- 13 畠山美穂・山崎晃「幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究：参与観察を通して得られたいじめの実態」『発達心理学研究』第14巻、第3号、2003年、284-293頁。
- 14 遠藤良江・和田信行・井上千枝美・河邊貴子「幼児期の『いじめ問題』をどう考えるか その（1）—幼児はどんなときに、『いじめられた』と感じるか—」『日本保育学会大会研究論文集』第50号、1997年、594 - 595頁。
- 15 牧亮太・湯澤正通「幼児の遊びにおけるからかいの機能」『保育学研究』第49巻第2号、2011年、30 - 40頁。
- 16 遠藤良江・和田信行・井上千枝美・河邊貴子「幼児期の『いじめ問題』をどう考えるか その（2）—保育の中で『見過ごすことができない』事例を通して—」『日本保育学会大会研究論文集』第50号、1997年、596 - 597頁。
- 17 遠藤良江・和田信行・井上千枝美・河邊貴子「幼児期の『いじめ問題』をどう考えるか その（1）—幼児はどんなときに、『いじめられた』と感じるか—」『日本保育学会大会研究論文集』第50号、1997年、594 - 595頁。
- 18 森田洋司・清永賢二『いじめ - 教室の病い』金子書房、1986年。

（卒業論文指導教員 伊藤敦美）